

その日、東京は名残の雪が冷たく降りしきる、寒い一日だった。1980年3月22日、中央大学駿河台校舎において閉校祭が開催された。ここに至るまでには、紆余曲折があった。南多摩郡由木村に本学が土地を購入するのは1960年。校地移転は既定の路線であった。とはいえ、学内では様々な意見が交錯した。当初は教養課程移転の路線もあった。しかし、本学は後楽園に理工学部を残し、夜間部を含む文系の全学移転に至る。この時から40余年が経過。そしていま、法学部の茗荷谷移転を間近に控える。ここでは、本学が駿河台を去った「あの日あの時」を紹介しつつ、未来へ向けての歴史遺産の継承について考えてみたい。

## 閉校祭プログラム

駿河台校舎の閉校祭は三部構成だった。閉校式、お別れパーティー、お別れパレード(提灯行列)である。閉校式は参列者約2,500名を集め、3号館(大講堂)を会場に15時から催された。テレビ放映用の煌々たるライトが天井のステンドグラスに照り映え、幻花の如き景観であったという。式典は崎田直次常任理事の開式の辞に始まり、校歌斉唱、渋谷健一理事長挨拶、戸田修三学長式辞、谷村唯一郎学員会会長挨拶、来賓の明治大学斎藤正直学長挨拶、遠山景光千代田区長挨拶、小沢清治地元町会代表挨拶と続いた。渋谷理事長は挨拶末尾で「喜びも悲しみも共にわかちあい親代りとなって学生たちを育てていただきました商店街、ご近所の皆様に対しまして心からお礼を申しあげます」と地域への感謝を重ねた。また、来賓の遠山千代田区長は「地域社会に活力と安らぎが確保され、幾多の俊傑が育まれたとき、そこには文字どおり文化の新しい創造の中心」となったことを強調した。共に地域に根差した本学の姿を再認識させられる言葉だった。そして、男声合唱部のリードにより、万感の想いを込め「惜別の歌」が斉唱された。参列者が一つとなった、見事な大合唱であったという。

16時20分から2号館1階の5つの会場で、お別れパーティーが行われた。第1会場では冒頭に渋谷理事長の挨拶があり、戸田学長が乾杯の音頭をとった。降雪により中庭が使えないことで、各会場は立錐の余地も無い混雑であったという。終宴も近い17時20分頃には、1号館2階のバルコニーに出た戸田学長の発声に応じて、雪舞う中庭にいた多くの参列者が傘を手に万歳三唱をした。

17時50分、打ち上げ花火を合図に約1千個の五色風船が空に放たれ、お別れパレードが開始。ここに3千人に及ぶ参加者があったという。高張提灯、横断幕、校旗、応援団旗、オープンカー14台を先頭に正門より出発。放送車から「長い間、大変お世話になりました」と感謝の言葉が繰り返され、参加者は雪降るなか、校歌、応援歌、中大節を歌い歩いた。19時近くになり、提灯行列は大学に戻り、バルコニーに立った崎田常任

理事と小川教学長が最後の挨拶を繰り返した。感動の余韻と哀惜の念を漂わせて閉校祭は終了。1926年の錦町校舎からの移転に始まる駿河台校舎の半世紀に及ぶ歴史は、ここに幕を閉じた。

## 歴史遺産の継承、そして未来へ

閉校祭の終了後、4月に発行された『学員時報』(第154号)に興味深い寄稿が2点掲載された。当時経済学部長の任にあった岩波一寛教授は「閉校祭の日の想いを綴ったらきりが無い」と、学び舎が無くなることへの哀惜の念を記した。そして、駿河台校舎の記念物を系統的に収蔵する記念館の建設が叶わなかったことを惜しんだ。さらに「先輩たちの大学生活の歴史の刻みこまれている遺産を、後に続く者達が直接目にし手に触れることのできることは、伝統を研究と教育のなかで生かしてゆかねばならない大学において、とりわけ貴重だからである」とした。

同様の指摘が、同じ経済学部の小川浩八郎教授からもあった。「駿河台校舎の最後の日に思う」と題する一文である。ここでは、本学の過去における歴史的創造の貴重な経験を正しく総括し、研究教育機関として本来あるべき姿の見取図を正確に描く必要が説かれた。そして、「中央大学は自分の歴史をもっと大切にしなければいけない。母校の歴史に神経がゆきとどいていないという風潮は、本学のきわめて重要な弱点といつてよいであろう。」と鋭く現状を分析した。

近年、私立大学の博物館が増えている。福澤諭吉記念慶應義塾史展示館、立教学院展示館、HOSEIミュージアム(法政大学)、帝京大学総合博物館等が挙げられよう。校地内の由緒ある建物を展示施設に転用した大学もある。しかし、駿河台を去り、多摩の新校地に活路を求めた本学には、2名の教員が指摘したように、自己の歴史と向き合うための施設は、実は未だに存在しない。法学部の茗荷谷新キャンパスへの移転は近い。それゆえ、歴史遺産の継承と未来へ向けての見取図の策定は、表裏一体で考える必要があろう。本学創立140年、150年の日はそう遠くない未来なのだから。

